

ゲオルク・フォルスターとマインツ共和国

——ドイツ・ジャコバン主義についての覚えがき その一——

高 原 宏 平

フランス革命期のドイツ・ジャコバン派にかんする研究の立ち遅れは、これまでにしばしば指摘されてきたが、政治史の分野でも、文学史の分野でも、その立ち遅れを克服しようとする努力が、近年になってようやくその成果をあげはじめた。とはいえ、当時フランス革命の直接の火照りのなかで「自由と平等」のために生きぬいた数多のドイツ人について、名前はともかく、その活動の輪郭すら、まだまだ定かでない部分が大きい。

人文地理学者・文筆家として名だかいゲオルク・フォルスターでさえ例外ではない。革命的民主主義者としての「かれの仕事は、ドイツ人の記憶のなかでは、ちょうどかれ自身が当時コーブレンツでドイツ軍に包囲されていたときのように、完全に封鎖されてしまっている。フォルスターが大革命期のパリから書き送った無限の価値をもつかずかずの書簡でさえ、この宿命的な遮断線を突破することはほとんどできなかった」（ヴァルター・ベンヤミン『カール・グスターフ・ヨッホマン「詩の退化」への序』）。

「ブルジョワ的歴史科学、とくに一八四八年以後のそれは、つねにドイツの生活におけるすべての革命的、民主的

努力を完全な忘却のうちに沈めようと努めてきた。フランス革命に直接味方したドイツ人のうち、今日ではごく僅かの人びとしか知られていない。ゲオルク・フォルスターがただひとり、完全には忘れ去られてしまうことのなかった存在であるが、それはかれが自然研究者として、またジャーナリストとしてすでに早くから一般に知られていたために、かれの活動と著作についての真にマルクス主義的な研究が今日なお欠けているにもかかわらず、忘れ去られずにいたのである。しかしフォルスターは多くの例のうちのひとりにすぎず、フランス革命の影響の真の展望は、これらの事実の研究が広くかつ深く推し進められるときのみ、可能となるであろう。その際には、もちろん、広汎な国民大衆の全体的気分も研究する試みがなされなければならないだろう」(ゲオルク・ルカーチ『若いヘーゲル』)。

いずれにせよ、この分野は、従来のドイツ文学史、思想史のなかでもっともなおざりにされていた領域のひとつである。それだけにごく基本的な事実関係の認識すら、われわれには曖昧なまま放置されている場合が多い。この研究ノートは、したがって、一般的にはドイツ・ジャコバン主義の、特殊にはゲオルク・フォルスターの文学の、研究の一部というより、そのための準備作業の一部——それもきわめて私的な暫定的なものでしかありえない。

*

まずドイツ・ジャコバン派という概念であるが、ここではフランス革命当時の一般的用語法に従って、革命的民主主義者というのとはほぼ同じ意味のことばとして受けとめておきたい。アンドレアス・ゲオルク・フリードリヒ・レープマン(一七六八——一八二四)やフリードリヒ・クリスチアン・ラウクハルト(一七五八——一八二二)によれば、ドイ

ツでは当時一般に民主主義者はジャコバン派と呼ばれていたという。ニュアンスに差はあれ、いずれも前近代的な封建制支配の桎梏にがんじがらめにされていたドイツの社会を近代化の方向に解放しようと望み、かつそのために活動した人びとを概括的に指示することばであった。

フォルスターについていえば、かれは、ドイツの民衆の悲惨そして知識人の悲惨が、当時ヨーロッパの各地で進行していた民主主義革命と結合することによってしか解決されえないことを根底から理解しえたごく少数の、国際的な視野をもつ知識人のひとりであった。フォルスターには、ドイツ人特有の狭隘で非実践的な、革命ギライの反動的思考は無縁であった。それは、かれの広い見聞と啓蒙思想に鍛えられた社会科学的構想力にもとづいていたのかもしれない。

一七九二年、フランス革命軍がマインツに進駐してきたとき、かれはその図書館長であった。まだ三十代でしかなかったが、かれはすでにきわめて多彩な経歴をあとにしていた。少年のころから父に連れられて世界周航——一七七三年から七五年にかけてのクック船長の第二次大航海——に加わったほか、翻訳その他の臨時の仕事をとおして実社会での生存競争のきびしさを知り、その後ヨーロッパ各地を転々とする間に、当時のドイツの知識人がひとしく味わわねばならなかった悲惨を身をもって体験した。しかし、それは、ビュルガーやレンツやヘルダーリンの場合とはちがって、どこかの城下町での家庭教師としての惨めさに限られるものではなく、フォルスターの場合、まさに「ヨーロッパ全体を舞台とするドイツ的惨めさ」(ベンヤミン)であったといえよう。

ここでドイツ的ということは、転形期にあって、もはやいかなる未来をも指向することのできぬヨーロッパの過去と呼んでもいい。「惨めなもの一切を温存することによって存続し、それ自身、支配の惨めさにほかならないような

政治体制。……社会は多種多様な層にかぎりなく分裂しており、そのそれぞれの層がくだらない反感と悪意と粗野な凡庸さをもつてたがいに対立し、それぞれの立場が曖昧で不信にみちた関係にあるために、形はいろいろあってもすべて一様に、王侯たちからお上の認知がなければ存在しえないものとして取り扱われている。そしてかれらが支配され、統治され、所有されているという事実でさえ、かれらはそれを神意によって認知されたこととして承認し、信奉しなければならぬ。他方、支配者たちのほうも、その偉大さはまさに頭数に反比例しているのである」(マルクス『ヘーゲル法哲学批判の序』)。

ドイツは、ヨーロッパ近代のなかでつねにその過去の「亡霊」としての役割を演じている、と言われてきた。われわれとしても、「ほかの近代諸国民が革命をなしとげたときに自分だけはしないで、ほかが復古をすれば、これは自分もいっしょになってする」(同上)という、ドイツ近代史の全体的な特徴をフランス革命当時のドイツにあとづけることは、それほど困難ではあるまい。

フランス革命のころのドイツは、「すみからすみまで完全に腐敗と胸のわるくなるような退廃とのかたまりであった。安んじていられるものは、だれひとりいなかった。この国の交易、商業、工業、農業は、どれをとってもほとんど無にひとしい状態におちいつていた。農民も商人も製造業者も、吸血鬼のような政府と不景気との二重の圧迫を受けていた。貴族と諸侯は、臣民にたいして苛斂誅求をおこなっていたにもかかわらず、増大する支出にみあうだけの収入を確保することができなかった。一切がくるっていた。教育は満足におこなわれず、出版の自由はなく、公共精神はみられない。他国との広汎な通商もない。いやしさと利己心——ずるくあさましい小商人根性だけが国民全体に浸透していた。すべてが朽ちはて、倒れかかり、急速に滅亡へと向かっていた。好転の望みはなく、死んだ諸制度の

残骸を運び去るだけの力さえ国民のなかにはなかった」(エンゲルス『ドイツの状態』)のである。

あるいは、ここでヘルダーリンの『ヒュペーリオン』のなかの激しいドイツ弾劾の章を傍証として引用することもできよう。

しかし、当時の絶望的な状態にたいする概括的な理解や悲痛な文学的反抗をたんに追想し、反芻するだけでは、当時の人びとがそのなかで生きていた複雑な現実のなかからヨーロッパそしてドイツの近代を規定するいくつかの契機を試行錯誤的にあれ何らか再構成しようとする手がかりは、ほとんど得られないであろう。それに絶望的状态とい、
「ドイツ的惨めさ」といい、この種のことばは、それが一定の歴史的文脈のなかで使われたときすぐれてアクチュアルな機能を果たしえたことばであるとしても、その文脈から切りはなされ商標のように一般化されてしまうならば、もはや何ひとつ具体的な内容を指示しえぬ非歴史的な単彩の虚偽概念と化してしまふものである。

それでは、当時のドイツ・ジャコバン派、とくにライン地方のジャコバン派は、どのような問題をかかえ、どのような活動をおこなっていたか。いうまでもなく、かれらがめざしていたのは、一般的には、当時の封建的支配秩序からの解放であり、政治的細分化状況を克服してナショナルな問題に解決の方向を与えることであった。しかし、この目標をどのようにして実現させるのか。その道筋を明らかにすることができないかぎり、ジャコバン派はジャコバン派ではありえなかった。当時のドイツ社会全体にたいする挑戦と反抗の精神、あるいはその裏返しとしての諦念なし絶望の気分というだけでは、当時のドイツ知識人一般とジャコバン派をとくに区別することはできない。簡単に言えば、革命のプログラムが問われるのである。

ドイツ・ジャコバン派は、その革命の道筋の選択において、フランス革命期全体をとおして、二度、重大な政治的

決断のまえに立たされた。いずれも、フランス革命軍が国境をこえてライン地方に進駐してきたことである。

最初の進駐は、フランス革命の上昇期、つまり大ブルジョワジーの利害に結びついたジロンド派が国政のヘゲモニーを握っていた時期におこなわれ、一七九二年十月から翌年七月まで九か月間にわたってライン地方の一部がフランス占領軍の支配下におかれた。二度目は、革命の絶頂期を過ぎてジャコバン独裁が崩壊したのちのことであったが、このときは一七九四年秋から一八一三年までほぼ二〇年ちかくフランスの支配がおこなわれた。いずれの場合も、ドイツの民主主義者たちはフランス軍を解放軍として歓迎した。しかし、被占領地域の政治的将来をどのように決めるべきかについては、ドイツの民主主義者の内部にはかなりの対立があったようである。

この研究ノートでは、問題を第一回目のフランス軍によるライン地方占領の場合に限定して、とくにマインツ共和国成立前後の事情をフォルスターの活動にそって若干あとづけてみることにしたい。

*

マインツ地方にジャコバン・クラブが正式につくられたのは、一七九二年十月二十一日にフランス革命軍が市を接収した直後のことであった。

ここで当時のライン地方とくにマインツ周辺の状態をヴァルター・グラープの最近の論文『ライン地方におけるドイツ・ジャコバン派とフランスの支配』によって簡単に概説しておこう。

ライン左岸地帯と呼ばれていたのは、南はアルザスから北はオランダとの国境近くのクレーヴェにいたる総面積二

一、〇〇〇平方キロの地域である。革命戦争が始まったころ、この地域には約一、八〇〇万人の住民が住んでいた、という。当時のドイツを全体として特徴づけていた政治的細分状況はライン地方ではとくに顕著で、少くとも九七人以上の諸侯や高位聖職者たちによってこの地方の統治が分けもたれていた。なかでも有力だったのはマインツ、ケルン、トリーアの三つの教権選挙侯だったが、いたるところに僧院や教団があり、ライン地方は、プファルツ地方にあった若干のカルヴァン派系の地域と北部にあったプロテスタント系の飛び地を除けば、全体としてカトリック系の性格が濃厚だった。そしてどの地域でも教権勢力が財政を支配し、騎士や行政官を自分たちでやっていた。ほとんどすべての市町村がそれぞれ固有の法体系を具えており、住民の生活は、地域ごとに教権と結びついた諸侯の官廷を中心に形成された封建制の枠組のなかに閉じこめられていた。地域差という各種各様の特殊性をこえてそこに共通していたのは、ただひとつ身分的な社会制度そのものであり、それは、臣民の政治的、経済的、社会的差別を原理とする分断支配の構造であった。閩閩政治と汚職がいたるところにはびこっていた。

この地方の主要産物は穀物と葡萄酒だった。都市での製造業は、教会中心の伝統的生活様式にみあう特権的同業者組合（ツンフト）の手工業にゆだねられたままであった。中世末期から近世の初めにかけて高度の文化の担い手であったライン地方の商業ブルジョワジーも、三十年戦争以後は大きな経済活動の場からしめだされ、また小国分立構造のなかでの複雑な関税の障壁にはばまれて、そのほとんどが雑貨商的な水準にまで落ちこんでしまっていた、という。かれらの日常は、こまごました同業者間のもめごとや宗教宗派の争いにあけくれ、経済的政治的主導権を發揮するどころではなかったのである。農民は、まだどこでも十分の一税をはじめとする封建的現物税を納めねばならず、そのうえ教会や貴族のための賦役を義務づけられ、移住の自由をきびしく制限され、いわば郷土に縛りつけられていた。

この間の事情をもうすこし詳しくマインツ市に即して見てみよう。クラウス・トレーガーは、かれが編纂した当時の記録資料集『マインツ——赤と黒のあいだで』の序文のなかで十八世紀後半のマインツの状況について次のように記している。

「選挙侯は、マニユファクチュアの経営者とくにフランス人やイギリス人やイタリア人やユダヤ人など外国の企業家を優遇した。世紀の後半には三九の工場設立のころみがなされたことが知られている。しかし記録にのこっている織物や金属や装身具の工場、酒類蒸溜所、染色工場等の業績については何ひとつ伝えられていない。おそらくすべて、ほんのしばらく続いただけなのだろう。いずれにせよ八十年代にはマインツに大きな企業はひとつものこっていなかったというのが事実である。資本主義化の道は、ここでも狭くしい地方主義と小国分立構造の迷路のなかにまぎれてしまっていた。じっさい、すべての投資が諸侯の関税に吸いあげられてしまうのでは、より高度な段階で輸出のために生産をするといっても、それはまったく意味のないことだった。

もともとマインツよりずっと不利な場所にあった近くの帝国直属都市フランクフルトが国際貿易のうえですでに重要な地歩を占めていたのにひきかえ、マインツでは、選挙侯フリードリヒ・カール・フォン・エルタールによって公式におこなわれた商業都市宣言も、それにもとづく年二回の大市も、結局のところはたんなる形式だけのことに終わってしまった。貿易収支もつねに後退を続けていた。マインツにはみるべき企業も銀行も存在しなかった。いわゆる身分としての商人の世界は閉鎖的な同業者組合以外のなものでもなかった。そしてこの同業者組合は、問屋と工場と仲買と運送を全部ひとつにまとめていた。組合にはいるには、最低五、〇〇〇グルデンの資産を所有していなければならなかった。かれらはさまざまな特権によって腐敗しきっており、市民階級としての意識はなく、王侯の存在を

自分たちの繁栄のために不可欠なもののみなしていた。」

「マインツがその富と華麗さにおいてウィーンにつぐ神聖ローマ帝国第二の都市といふかなしい名声を拍していたのは、いわれないことではない。関税や税金による選挙侯の収入は莫大なものであり、支出もその収入に見合っていた。マインツ市のあらゆる産業は、豪奢をきわめた選挙侯の官廷の諸経費にあてるために営まれていた、といつても過言ではない。浪費は際限を知らなかった。エルタール体制崩壊の直前まで、官廷予算と国家予算は全然区別されていなかったのである。そこでは税の三分の二が選挙侯の金庫に流れこむ仕組だった。その残り全部でもマインツ市の市としての必要経費はとうていうめられるものではなかったが、実際に公共の必要にふりあてられたのは、その残りうちのぎりぎり三分の一に過ぎなかった。あとは都市貴族のふところにはいった。」

以上のような社会的背景のなかでフランス革命は当然この地方にも影響を及ぼさないわけがない。マインツ革命の問題を考察するためにはいうまでもなく、こうした官廷の腐敗を明らかにするだけでなく、当時このマインツの選挙侯エルタール大司教によってとりしきられた神聖ローマ帝国最後の皇帝フランツ二世の戴冠式にまつわる諸問題、あるいはマリー・アントワネットがドイツ諸侯とくにマインツの官廷とのあいだにはりめぐらした反革命の陰謀などについて具体的に調べる必要がある。一七九一、二年、窮乏になやむマインツの一般の人びとのまえで、「大司教はフランス市民階級の仇敵であるルイ十六世の兄弟、コンデ將軍、さらに六〇〇〇人の亡命貴族のために招宴をはり」、その権勢を誇示していたのである。

ここでは、しかし、その種の問題には立ちいらす、むしろ革命の主体の側、つまりジャコバン派の動きを辿ることに焦点をしぼりたい。

*

一七八九年の秋以降、フランス革命の影響は、ライン地方でもいたるところにみられるようになった。ライン左岸のいくつかの農村では、農民が小作料の納入と賦役を明確なかたちで拒否しはじめた。一七九〇年の二月から三月にかけて、マインツ近隣のアシャフェンブルクでも一揆が起こり、農民は要求をかかげて訴願運動をくりひろげた。九月には、マインツ地区の手工業見習職人たちの動きも始まったと記録されている。しかし、ライン地方での自発的な暴動は、すべて直接的、散発的で、横に組織されることもなく、また明瞭な政治目標をかかげることもできず、地域的に限定されたままに終わったものらしい。

結局、ある程度持続的なかたちでフランス革命という世界史的な事件になんらか現実的にかかわりえたといえるのは、一部知識人を中心とする運動だけであった。当時、ライン地方には、ケルン、ボン、マインツ、トリーアの四つの町に大学ないし神学院があったが、どこでも啓蒙思想が教授層や学生層のなかに多くの信奉者を見いだしていた、といわれている。かれらは、偏見や迷信に包まれた蒙昧からの解放を、自分たちの使命であると感じていた。かれらは、多くの場合祖国愛を声たかくうたったけれども、それはフランス革命のなかでの一般の用語法にみられるように共和制への志向を内包しているものであって、もともといかなる種類の排外主義的偏見ともかわりのないものであった。一七八九年以後、ライン地方の諸侯は、フランス革命の思想に共鳴するこれら知識人の動きにたいして、きびしい弾圧政策をとりはじめる。

マインツにおいても、エルタール大司教の政策がフランスの亡命貴族の政治へと変貌するとともに、フランス革命に賛成する人びとは、きわめて悪質なスパイをつけられ、有形無形の迫害にさらされた。選挙侯のかつての啓蒙家めいた言動は、決定的な刻限が迫るにつれて、茶番以外のなものでもないことが、はっきりしてくる。選挙侯によってマインツに迎えられた多くの啓蒙派の知識人の場合も例外ではない。そこにはもはや言論の自由の名残りさえみられなくなっていた。

これは当時のどの都市についてもいえることであったが、知識人たちによって担われた民主化運動の多くは、フリーメイソンのような秘密結社の活動をとおして、しだいに組織されていったものらしい。マインツのジャコバン・クラブも、そのままからすでに存在していた一種の読書サークルが母体となって結成された、という。当時、ゲッティンゲンの反革命派が編集した『革命年鑑』は次のように報じている。

「かなりまえから事情通のあいだでは、ライン地方とくにマインツにおいてジャコバン主義と民主主義の精神が強力に活動をくりひろげていることは、もはや秘密ではなくなっていた。フォルスターは、かれの『観想』や他人にさせた多くの翻訳の跋文などで、自分が革命の原理の擁護者であることをあからさまに告白していた。ホーフマン教授とメッターニヒ教授は読書サークルのなかで民主主義の思想を公然と教えていた。かれらのほか、エッケマイヤー、ヴェデキント、ハルトマン、ウムフェンバハ、シュタム、ブラウ、ホーフ、グートマン等何人かのもは、秘密の会合を重ね、選挙侯にたいする陰謀をめぐらしていた。かれらのなかには、定住の地もなかったときに選挙侯のおかげでマインツに招かれたものもあるし、たいいていのものは数多の慈悲に浴し、選挙侯の庇護のもとにあったのである。恩義を知るといふことは革命の徳性のなかにはないらしい。スネードルフは、一七九一年と一七九二年にかれが書い

た『旅をするデンマーク人の手紙』のなかで述べている。「わたしはフランクフルトからマインツ、マンハイム、シュトゥットガルトをへてチューリヒ、バーゼルにいたるまでいたるところ熱心な民主主義者が十中八、九まで見いだされることを確言できます。わたしのもっている住所録はたしかです。わたしは公けの集会にでかけて行って、このことを確かめたのです。ものを考える人びとの大部分はイルミナーテン（フリーメイソン会員）です。この教団は深く広く根を張っています」と。コストハイムや△フルステンベルガー・ホーフ▽では、しばしばマインツのイルミナーテンの支部集会やジャコバン主義者の極秘の会合がひらかれていた。ホーフマンは、あるとき講義のなかでフランス革命を熱狂的にたたえたあとで『このような革命がわがドイツにおいてもまもなく起こらないとするならば、わたしは神の摂理を疑うものである』と述べた。たしかに当局は一応の捜査はおこなっている。しかし例によって生ぬるいゆるやかなものでしかない。れっきとした革命家にたいする多くのドイツの町々での捜査がいまになってもこのように生ぬるい性格のものであっていいのだろうか。」

さきにも書いたように、マインツでは、一七九二年十月末にフランス軍が市を接収した直後からジャコバン・クラブは正式に活動を開始した。かれらは、△自由と平等 友の会▽あるいは△マインツ人民協会▽という名のもとに集まり、ストラスブールのジャコバン・クラブの規約をほとんどそのまま踏襲して、「自由に生きるか、さもなければ死を」と誓いあった。会は、短命ではあったがマインツ革命の全期間をとおして、多数のビラやパンフレットや新聞を発行し、集会・演劇その他あらゆる手段をつかって、住民にたいする革命のアジテーション、プロパガンダを系統的におこなった。フリードリヒ・レーネやニコラウス・ミュラー等、わかい詩人たちによって作られた革命歌ものこっている。

文学がブルジョワ社会の形成過程において、いかに人民解放の大事業という目的にそって、大衆的なかたちで展開されたか、クラウス・トレーガーが若干ころみているように、この問題をジャンル論、文体論的な面から検討することは、きわめて重要な仕事であるが、それはこの研究ノートの主題ではない。いずれにせよ、このときの革命的民主主義者の文筆活動の精神は、それがやがて一八四八年の革命にさいして『新ライン新聞』という近代的な革命的ジャーナリズムの活動のなかへひきつがれていく、という見地から、歴史的に正当に評価し直される必要がある、と思われる。

さきに引用したマインツのジャコバン・クラブにかんする反革命文書のなかにも数多くの人びとの名が列挙されていたが、ここで、その主要メンバーのなかから何人か代表的な人びとを取りあげ、その経歴を簡単にみておこう。

アントン・ヨーゼフ・ドルシュ（一七五八—一八一九）。もともとはカトリックの司祭で一七八二年から八四年までフランスに留学、一七八七年に哲学の教授としてマインツ大学に招かれた。しかし、カントおよび啓蒙主義哲学の信奉者であったかれは、やがて革命思想の持主としてマインツから追放され、一七九一年から九二年にかけてストラスブルに赴き、その教会で司祭代理をつとめるかたわらカトリック・アカデミーで倫理学を教えた。革命期には、ストラスブルのジャコバン・クラブからマインツに派遣され、一七九二年十一月にはマインツ臨時行政部の首席に選ばれた。マインツのジャコバン・クラブの発行文書のいくつかは、かれの筆によるものである。マインツ陥落後は、フランスに逃れ、フランス共和国のために働き、パリで客死した。

ゲオルク・クリスチアン・ヴェデキント（一七六一—一八三六）。ゲッティンゲン大学で医学を修め、その後いくつかの地方都市で開業、一七八五年、選挙侯の主治医としてマインツに招かれ、同時に大学の臨床学教授となった。革

命期には、ジャコバン・クラブのなかでももっとも重要な文筆家のひとりとして活動したが、一七九三年以後はフランスのライン地方派遣軍の軍医となり、テルミドールののちジャコバンをはなれた。さらに一七九七年以後は、マインツの病院の再建につくすとともに、エコール・サントラルの教授となった。一八〇八年、ヘッセン・ダルムシュタットの宮廷に招かれ、大公の侍医に任じられ、男爵の称号を与えられた、という。

アンドレアス・ヨーゼフ・ホーフマン（一七五三—一八四九）。ながく家庭教師をしていたが、のちにマインツ大学の自然法学ならびに哲学史の教授となる。マインツ革命の政治的指導者のひとり、ジャコバン・クラブの会長をつとめたほか、ライン地方ドイツ国民議会の議長に選ばれた。フランス軍による第二次ライン地方占領後、しばらくのあいだ総裁政府のもとでドナースベルク地方の主席収税官になったが、まもなく夫人の田舎にひきこもり、二度と政治的に活動することはなかった。しかし、かれは、マインツのジャコバン派のなかでももっとも徹底した民主主義者で、最期まで革命思想を捨てなかった、といわれている。

マティーアス・メッターニヒ（一七五八—一八二五）。はじめ小学校の教師をしていたが、奨学金をえてゲッティンゲン大学で数学をまなび、一七八六年以後、マインツ大学の数学の教授となった。革命期には、ジャコバン・クラブの指導的メンバーのひとりとして活動、雑誌『市民の友』を編集・刊行したほか、数多くのビラを作り、演説をした。マインツ陥落にさいして、反革命軍にとらえられ二年間拘禁された。釈放後はアルザスへ行き、フランス軍がマインツに戻ってきてからは、そのエコール・サントラルの教授に任命された。

クリストフ・フリードリヒ・コッタ（一七五八—一八三八）。有名な出版者の兄で、もともとは法学者であったが、学校の教師をしたり、出版事業にたずさわったりしていた。一七九一年、ストラスブルでそのジャコバン・クラ

ブのメンバーになった。革命期には、かれもドルシュとおなじくマインツの友人たちに呼ばれて、マインツ共和国を実現させるために奔走、ビラを書いたり、パンフレットをまとめたりした。一七九三年初めには、フランス軍占領地区の郵政部門の責任者になり、フランス軍の撤退とともにストラスブルに戻った。そこでしばらくのあいだ市会の代表として警察行政にかかわっていたが、九四年には八か月の拘留処分を受け、釈放後、ストラスブルの『ライン新聞』の共同編集者のひとりとなった。その後、一時期、ドイツにおけるフランス共和国郵政局総裁をつとめたが、九九年には、また『シュトラースブルク新聞』の編集者になった。その後、フランス共和国の官吏としてさまざまな部門で活動したのち、一八一〇年にはドイツへ帰国した。

以上のような人びとのほかに、ジャコバン・クラブの中心メンバーとして、神学者のフェリックス・アントン・ブラウや高校教師ゲオルク・ヴィルヘルム・ベーマー（この人は占領軍最高司令官キュステイーヌ將軍の顧問をつとめるとともにジャコバン・クラブの機関紙『新マインツ新聞』の発行人であった）、その他の人びとの名も挙げなければならないが、詳しいことはわからない。

ヨハン・ゲオルク・アダム・フォルスター（一七五四—一七九四）は、ジャコバン・クラブ結成当初の会員ではなかったが、三週間たらずのあいだに入会した。

クラブは、その最盛期には四九二名の会員を擁していた、といわれている。当時マインツの人口は約三万であった。

*

フォルスターは、遺稿『マインツ革命叙説』のなかで、マインツのジャコバン・クラブのことを次のように書いている。

「フランス軍がはいってきて、市の城門を占領したのは、夕方であった。民衆は鈍重におし黙ったままかれらを迎えた。あからさまな反撥のきざしもなければ、かといって拍手もおこらず、歓声もあがらない。……」

大衆の冷淡さは、しかし、住民の一部が抱いていた生き生きした喜びの感情の発露を阻げるものではなかった。この層は、たしかに数こそ少いが、その知性と独立の精神とによってきわめて重要な役割を担いうる人びとであった。この革命の側に立つ人びとは、長いあいだ、いまの瞬間を待ちかねていたのである。いまこそ自分たちの信条を公然とかかげて、祖国の統治形態の改造のために働くことができるという、それは言いしれぬ感動であった。……かれらは、フランス軍による市の接收の翌日、公式にひとつの人民協会として結集し、フランス革命のシンボルをかかげて、自由で生きるか、さもなければ死をVと誓いあった。そして、共和制にもとづく自由と平等の意義を公共の集会の場で人びとに説き明かし、それが広汎な人民によって承認されるように努力しよう、と宣言した。……

しかし、運命がその裁きをおこなうために用いる道具は、応々にして、格別の価値も長所もないごくつまらぬ普通の道具であることが多い。……マインツのジャコバン派の場合も、すべての虚飾をとってしまえば、あとに残るのは、結集を急ぎすぎたことから生じるさまざまな欠陥をそなえたできそこないの集団だけであった。このような寄せ集めでは、とうてい、教養と常識のある人びとのけだかい気もちを充たすことはできない。会員のなかには、たしかにりっぱな人びとも名をつらねている。高潔さのゆえに王侯の不興を買い、迫害にさらされた何人かの優れた法学者たち、誠実な市民として敬服され、人望を集めている商人たち、選挙侯から収入を与えられ、大部分は選挙侯に利用さ

れている大学教授のなかの何人かの信頼すべき人びと、そして最後に明晰な思想によって自らを人びとの真の教師に改造した幾人かのりっぱな司祭たち、これらの人びとの名がここの人民協会のリストにのっている。たしかに、このような人びとならば、どんな団体でも誇りにすることができよう。しかし、われわれは、大勢の粗野な学生をはじめ、まだヒゲも生えそろっていない若者たちを、何人かのあまり評判のよくない人物とともに、審査も選択もせず、入会させてしまったのである。それは、ひとつには会員数を増やすためであり、もうひとつには平等の原則を完全につらぬくためであった。……

時代にさきがけた自由の精神の胎動、とりわけドイツの地にフランスにおける人民政府の諸原則をそのまま移植しようという希望は、しかし、いくつかの角度からみて、たんに時期尚早であったというだけではない。真の人間の利害にかなったひとつの体制を築きあげるうえで、障害となるようにさえ思われた。ドイツの現状、その住民の性格、かれらの教育水準とその特殊性、さまざまな統治組織と立法形態の混淆、要するにその経済的、政治的、精神的諸連関からみて、ドイツは、もっとゆるやかで段階的な完成と成熟とを必要としているのである。ドイツは、隣国人の誤りと苦しみとによって、さらに賢明にならなければならない。かれらが下から力づくで一挙に奪いとらねばならなかった自由を、おそらくは上から徐々にゆっくり手にいれるべきであろう。改革派の人びとの性急さは、場合によっては、この穏やかな事態の進行を阻害するかもしれない。いっぽう支配者たちの性急さは事態の進行を促進する。どちらもそれぞれの明白な意図に反してである。じじつ、ドイツの王侯たちは、フランス革命に干渉することによって、ドイツの平和を危殆に瀕せしめた。しかし、現在の瞬間では、自由の使徒たちの拙劣さは、かれらが自由を押しつけようとしている当の相手の民衆にとってすら眼にあまるものであって、何人かの諸侯が革新の気運の高まりにたいし

て加えようとする苛酷な弾圧政策に口実を与えている。われわれは、恣意的で不正な支配者がいかなる憎しみをわれわれに向かつて浴せかけようとも、それに耐えうるところまで成熟してきた。しかし、われわれ自身にとっては、憎しみの感情はまだ強すぎる。われわれ自身の力をかえりみれば、憎悪は、ほかのすべての充たされない情熱と同様、われわれを内面からむしばむものでしかない。」

フォルスターは、ふつう言われているような感傷家、空想家ではなかった。冷静に現実をみつめるなかで、革命家としての道をみずからの責任において歩んでいったのである。それでは、十月二十三日のマインツ人民協会の結成から十一月初めまで、しばらくの間であるとはいえ、なぜ、フォルスターはクラブへの入会をためらい、直接的な政治活動を控えたのか。フォルスター研究者のほとんどは、それぞれの立場からこの問題の究明にとりくんでいるが、『革命叙説』に述べられているフォルスター自身のこの反省が何よりも正確にこの間の内面的葛藤を示している、と思われる。

フォルスターは、フランス革命の帰趨をヨーロッパ全体の民主化にかかわる問題として把え、すでに早くからジャコバン派への加担を明言していた。「わたしは、自分があくまでもジャコバン派の側に立つことを、よろこんで告白します。ジャコバンがなければ、パリでは疑いなくただちに反革命が起こり、同時に一七八九年以前の状態への逆転が無条件に進行していたでしょう」と書いたのは、パリの民衆が八月十日テュイルリー宮殿を襲撃する二か月まえのことであった。「第二次革命は必至であり、こんどはかならず王制の廃止が問われるはずです。」このように書くフォルスターの立脚点は、「観念の空転しか知らぬ」当時のドイツ知識人一般のそれではなかった。民衆革命の実践こそ市民的自由を実現する道程における不可避の前提であることを、フォルスターは、革命の現実にたいする冷静な

観察をとおして、精確に見ぬいたのである。遺稿の断片『パリ素描』の第一通信に記されているように、フォルスターにとって、「革命はまさに革命」以外のなものでもなかった。そしてこの革命の実践のなかでこそ、民衆のたくましい知性と細やかな感性は研ぎすまされていく。これがフォルスターの認識であった。革命の五年間がパリの民衆にたいしていかに際立った昇華作用を及ぼしたかについて、フォルスターは、ある種の感動をおさえながら、書き綴っている。「朝になると、物売りの女たちがみんな街路に出て、石炭の火を囲みながら、新聞を読んでいる。晩には、クラブの会合や地区の集会で、水売りや靴職人や荷馬車曳きが国事を論じ、当面の急務について語りあっている。そのひとりひとりのきっぱりした喋り方は、一般にひろめられている基本概念のもつ単純な明快さと精確さとからのみ生じうるものだ。たしかに、ごく少数の理念を組み合せただけでは、狭い一面的な判断しか出てこないかもしれない。しかし、それが偽の、みせかけだけの概念でなければ、そこから誤った結論に導かれるということはない」(『パリ素描』第七通信)。自由・平等・友愛といった革命の基本概念がパリの民衆の生活感情のなかに、いかに深く根づいているか、フォルスターは、民主主義の実現の過程を転形期の民衆のたくましい日常の営みのなかにあとづけた。しかし、この条件はドイツにはない。

フォルスターは、早くから、「ドイツの革命への成熟について、わたしは確信をもっていません。そして未熟な革命はかならず苦渋にみちた結果をもたらすことになる、と考えています」と述べ、十二月にはいつてからも、「革命の機がまだ熟していないとするわたしの考えに、変りはありません。しかし、あらゆる戦争のなかでもっとも不幸なこんどの戦争(プロイセン||オーストリア連合軍による反革命戦争)がむりやりに続けられれば、それは不可避免的に革命を月足らずのかたちで生み落とす結果になるでしょう。このことが、いかに恐ろしい忌わしい事態を招くかは、はっきり

りしています。……わが国の粗野で貧しく無教養な民衆は、怒りたけることはできても、自分たちの政治体制をみずからつくりあげるだけの能力はありません」と書いている。

ごく個人的な書簡のなかであるとはいえ、ドイツ人とりわけ市民層一般にたいするフォルスターの不信感には、拭いがたいものがあつた。しかし、これを当時のドイツ啓蒙主義者に共通する観念的思考の限界としてのみ把え、精神的解放を政治的解放に先行させ、教育を革命に優先させる改良主義であると極めつけるのは、どの観点からそれがなされるにしても、あまりにも没歴史的であり、こみいった現実の諸連関を単純に図式化してしまふ見方である、と思われる。

フォルスターは、積極的にジャコバン・クラブに参加し、自らの責任においてひとつの政治的選択をおこなつたのである。そのさい、これまでの啓蒙主義的な姿勢を崩してしまつたわけではない。フォルスターの場合、むしろ、マインツでの革命の実践は、語の本来の意味での啓蒙思想の徹底であつた、とみるべきであらう。このことは、さきに引用した『革命叙説』のなかからも、はっきり読みとることができるはずである。かれの啓蒙主義はコスモポリタニズムと表裏一体のものであつたけれども、そのいずれもがブルジョワ社会の形成期における市民精神がもつ不屈の積極性に支えられたものであつた。

ともあれ、ヨーロッパ全体の変化を鋭敏にとらえていたフォルスターの時代感覚のなかでは、ドイツは、ヨーロッパのなかでもっとも遅れた部分として映っていたにちがいない。かれの思想の根底にある非暴力主義は、ドイツの現状についてのリアルな洞察にもとづくものであり、かれの漸進的改革の考へには、部分的改良にとどまらず、変革の徹底を志向するきわめてラディカルな契機がふくまれていることを見誤ってはなるまい。

王侯貴族をはじめとする当時の上流社会との関係において、フォルスターは、もはやひき返すことのできない境界線をこえた。しかし、それは、すでに述べたとおり、かれの思想の必然的な帰結なのであって、かれがそれまでのかれの思想を捨てたことにはならない。さらにまた、ドイツのブルジョワジーにたいしてフォルスターが抱いていた不信は、フランス革命軍のライン進駐によって一挙になくなるものでもちろんなかった。マインツのジャコバン派のなかでのフォルスターの一貫した主張、すなわちライン左岸地帯のフランスへの合併の要請は、この矛盾から出てきたものとみるべきであろう。

フォルスターは、特権階級をのぞくすべての人民諸階層の協同が、封建的支配秩序をうち破るために必要な前提であることを、つよく認識していた。かれは、帝国旧秩序をつき崩しえないドイツの民主主義のひよわさをドイツ人民の未熟さということばであらわした。それは、下層部分の自発的な行動を促すことによって、その成熟をはかろうとするフランスのジャコバン派のダイナミックな運動からは、たしかにほど遠いものであった。かれのマインツでの政治活動の全期間をとおして、フォルスターは、自分たちの革命への志向を下層大衆の要求と目標とに重ねうる現実的な展望を、結局は切りひらくことができなかったのである。

ドイツ全体のナショナルな社会的課題を解決するには、一方では、どうしても△ドイツ革命▽を現実のものとしなければならぬ。しかし他方、ドイツの現状では、そのような全社会的な変革のための主体的条件は、ほとんどと

*

のっていない。ライン左岸地帯のフランス共和国への合併の構想は、反革命戦争の危機のなかで、まさにこのディレンマから脱け出そうとする、いわば苦しまぎれの方策だった、といってもいい。

フォルスターがドイツの民衆の未熟さを指摘し、時期尚早の革命への危惧を率直にもらしたのは、しかし、ごく私的な書簡のなかだけであって、その種の見解を公然と表明することは、慎重に避けていた。

したがって、ドイツの革命についての、フォルスターの公式の場での発言のなかでは、フランス軍という民主主義の強大なうしろだてにたいする依存の姿勢が、つねに正面にでてこざるをえない。それは、現在のわれわれの無責任な立場からいえば、ほとんど手ばなしともみえるほどの期待と讚美とにいろどられたものだった。フォルスターがマインツのジャコバン・クラブではじめておこなった演説は、十一月十五日の「マインツのフランスにたいする関係について」と題する講演だったが、そこでは、「自由と平等の旗じるしのもとに、フランス革命とかたく結びつき、フランスの人民とともに共同の事業をなすとげて、このマインツに近代ドイツのひとつの範例をつくりあげよう」という希望が力づくよく掲げられると同時に、「フランスは自由であり、自由な人間が自由な人間に命令することはありえない。市民諸君！われわれも自由となり、自由な憲法をみずから選びとらねばならない。フランスはわれわれに援助を約束している。われわれが自由を選ぶとき、フランス軍はもはや征服者ではなく、われわれの血をわけた同胞となる」と述べられ、「疑ってはならない。フランス共和国は、われわれに援助と友愛の手をさしのべようとして、われわれの宣言を待ちのぞんでいる。マインツとその周辺の住民は、いまこそ、自由なフランス人として生きたい、という自分たちの希望を明瞭なことばで告げなければならぬ。それだけで、われわれは、不滅の自由国家の一員になることができるのだ」と帝国からの離脱の意志がつよく訴えられている。

もちろん、フォルスターは、事態の進展のなかで、全ドイツ人民の蜂起によって旧帝国の支配体制が揺り返される可能性を、全然見ていなかったわけではない。しかし、民衆蜂起の手がかり、あるいはその主体的な条件については、何ひとつ具体的に示すことはできなかった。

「同志の市民諸君！ 連合軍による二度目の反攻がはじまったとしても、自信を失ってはならない。ドイツが、いや地球全体がいま歩みはじめているこの自由への道は、神の摂理なのだ。この摂理によって、支配者たちは家臣もろとも打ちのめされてしまうだろう。わたしも、ごく最近まで、ライン河の東では自由の機はまだ熟していない、と考えていた。しかし、運命の手は奇蹟をおこなう。特権諸身分が破滅をまぬがれるには、もはや即時の平和締結以外に方法はない。かれらは、失われた過去にしがみつくことをやめて、状況に即した賢明な政策をとらなければならない。民衆にたいして柔軟かつ寛容な政策をとらなければならない。あらたな攻勢などという武断政治は、長いあいだ耐えしのんできた人民の怒りをかうだけである。人民はかならず立ちあがり、刑吏たちに正義の復讐をおこなうであろう。」

ここで用いられている摂理とか運命とか奇蹟といったことばは、たんに演説用の飾り文句であるというより、むしろフォルスターが、ドイツの現状についてのリアルな認識のなかで、人民革命の道すじについては、ほとんど現実的な展望をもっていなかった事実を如実に示しているように思われる。

以下、一七九二年十一月から翌年三月までの事態の動きを、とくにマインツのフランスへの帰属要請の問題を中心に、辿ってみよう。

*

一七九二年十一月十九日、パリの国民議会は、ジロンド派の外交政策を承認し、「国民議会は、フランス国民の名において、自らの自由を恢復しようとするすべての国の国民に友愛と援助の手をさしのべるであろうことを、ここに宣言する」という有名な布告にもとづく法令を採択した。アルベール・ソブールによれば、国民議会の意見はこのとき、独立国としての姉妹共和国創設の方向に傾いており、ブリソは、フランスをめぐる△いくつかの共和国の帯▽を考え、グレゴワールは、皆も国境もない新しいヨーロッパを予告していた、という。

マインツでは、この法令にたいしていかなる態度をとるべきかをめぐって、ジャコバン・クラブの内部にはじめて大きな意見の対立が生じ、クラブの内外で激しい論議がかわされた。フランスへの即時合併を主張するもの、とりあえずパリの国民議会に請願をおこなうべきだとするもの、あるいは、まずマインツの同業者組合の意見を聴取すべきだと要求するもの、意見はほぼこの三つにわかれたが、このなかで第一の意見が比較的優勢だったらしい。なおここで三番目の要求は、実質的には、フランス共和国の政策にたいする間接的抵抗であった、と理解すべきであろう。というのは、すでに述べたとおり、当時の同業者組合はきわめて保守的、反動的な性格をもっており、たとえば占領軍最高司令官キュスティーン將軍から希望する統治形態について諮問をうけたとき、マインツの同業者組合の代表九七人のうち八一人までが共和制を拒否したのである。「古い統治体制でも、それを本来の純粋なすがたに戻せば、りっぱに役にたつ」というのが、かれらの大多数の主張であった。

十一月十九日の法令をめぐってマインツで討議がすすめられているあいだに、しかし、戦況に重大な変化が起こりはじめていた。その間に反撃にうつったプロイセンとヘッセンの連合軍が、十二月上旬にはフランクフルトを陥落させたのである。マインツのジャコバン派の立場は急速に弱まった。フランス革命軍の軍事的後退が一般市民のあいだにどんなに大きな動揺をもたらしたかは、想像にかたくない。フランスへの協力者にたいする報復を呼びかけたビラも、ライン地方全域にわたって大量にまかれた、という。住民は旧支配者たちの威嚇におびえていた。そして攻勢に転じた反革命連合軍は、しだいにマインツに近づいていた。

パリでも、この間に、情勢は急速に動いていた。十二月十五日には、十一月十九日の法令をさらに具体化して、被占領地域に革命的な政府をつくるための新しい法令が国民議会で議決された。そして、これまでの特権階級の財産はすべて没収され、十分の一税と封建的諸権利は廃止され、新しい行政政府が人民によって選ばれることになった。被占領地域の人民も、フランス革命の包括的な政治体制のなかにじかに位置づけられるようになったのである。

民族自決権と人民主権の原則は、しかし、フランス革命をつらぬく思想的根幹のひとつである。たてまえとしては、この原則をゆるがせにすることはできない。フォルスターも、「共和国の固有の原則にもとづけば、征服などありえません。自由のための自由な選挙によって事を決めなければならぬのです」と、この時期に書かれたある手紙のなかで強調している。

十二月十五日のパリの国民議会の法令は、マインツのジャコバン派にとって、かれらが貴族や教権勢力とたたかうさいの重要な法的根拠となった。そして一七九三年の初めには、パリから二人の人民委員と三人の議会代表が到着して、新しい行政政府を確立するための選挙の準備が本格的に始まった。

しかし、さきに述べたように、前年末からの戦況の悪化にともなって、ジャコバン・クラブの活動は、いちじるしい困難に逢着していた。会から脱落していくものもかなり出はじめていたらしい。一月十日の会議では、「自由と平等の原則がなぜ住民のあいだに賛同をえられないのか」という議題をかかげて、集中的に組織活動の再検討をする事になった。以下、グループが紹介している記録にそって、この会議のあらましを追ってみることにしよう。

この会議で、マインツのジャコバン・クラブのこれまでのありかたについて、だれよりもきびしく忌憚のない意見を述べたのは、アンドレアス・ホーフマンであった。かれは臨時行政部の首席ドルシュと副首席フォルスター（なおフォルスターは一月からジャコバン・クラブの会長を兼任している）をはじめ、ヴェデキントやゲオルク・パーペ等指導部にたいして、するどい批判の鋒先を向けた。ホーフマンによれば、かれらはみな占領軍最高司令官キュステイーヌやフランスの人民委員と結託して、マインツの市民と農民の財産を侵害し、生命の安全をすら脅かしている。同胞にたいする革命軍の暴力行為や不当な徴発をやめさせようとしなかった責任は、いったいだれにあるのか。いまの状態では、自由と平等という革命の理念がひろく人びとのあいだに根をおろすわけがない。現状のままでは、フランス軍がマインツを維持することすら覚つかないだろう。キュステイーヌは権力をかさに、合併反対派の人びとを威嚇するたために、広場に五つの絞首台を作らせたが、思いあがりもはなはだしい。こうした行動には自由の精神のかけらもうかがわれない。ドルシュにいたっては、選挙侯の居城から美術品を盗みだしたり、無能な身うちのものを独断で行政部の役職につけたりする始末である。これをいったいどう弁明するつもりなのか。「このほかに、あなたが働いた悪事の数々をあげれば、際限がない。あなたは、もはやこの町にはとどまることができないはずだ。かりに人を

追放する権限がわれわれに与えられるならば、わたしは、躊躇なくあなたに向かって、かつてキケロがカティリーナにしたように、市からの追放を言いわたすだろう。しかし、われわれにはこの権限はない。したがって、わたしはあなたを、会にとって有害なメンバーとして、われわれのクラブから除名することを提案する。」ホーフマンの発言は、批判ないし自己批判というよりも、むしろ告発そのものであった。会議は重苦しい空気のなかで進行し、翌日も審議をつづけることになった。

翌日の会議には、キュステイヌも特別に出席したが、かれは、ホーフマンをフランス国民にたいする侮辱のことで処刑することもありうる、などと脅迫的な言辭をならべた（その後キュステイヌが八月になってパリの革命法廷で裁かれたときの罪状には、このときのかれの発言もそのとひつに数えられた、という）。この日は、前日ホーフマンから非難されたメンバーもそれぞれ立って発言したが、ホーフマンの告発の理非をただすというより、いわれない中傷をホーフマンに投げかえただけで、会議は、收拾のつかぬ泥仕合におちいつてしまったらしい。結局、議長をしていたフォルスターが最後に、「すべてを水に流して一切の反目を放逐し、同志愛をたいせつにしよう。今後、われわれとしては、この事件に触れてはならないことに決めたい」と提案し、十日と十一日の議事録を会の記録から抹殺することにした、という。じじつ、この二日間の記録はどこにも存在していないようであるが、グループは、この会議の書記をつとめたヨーゼフ・シュレンマーというひとの記憶をもとに書かれたカール・ゲオルク・ボッケンハイマーの論文からこのときのいきさつを紹介しているのである。

なお、ホーフマンのドルシュにたいする非難の内容が事実を即したものであるかどうかは、いまのところそれを正確に判断する材料がない。しかし、すくなくともキュステイヌとフランス軍の行動にかんする部分は、フォルスタ

『革命叙説』その他をみても、ほぼ事実どおりのことであつたらう、と推定できる。

マインツのジャコバン・クラブのなかでの対立は、もともと、たんに会員同士の内紛といった性質のことがらではなかつた。そこには、ライン地方にたいするフランスの占領政策、ひいては革命政府の外交政策全般にみられる矛盾が、ごく隠微なかたちで反映していたのである。

パリにおいては、国民議会やジャコバン・クラブの内外で、革命諸勢力のあいだの葛藤がしだいにその激しさを増してきていた。ジロンド派は、そのころにはすでにジャコバン・クラブのなかからは排除されていたが、共和国の軍隊が勝利を収めていたあいだは、政権をとまかく維持していた。そして、フランスを抑圧された諸国民の解放者たらしめることによって、国王の処刑問題以来背を向けはじめていた革命的世論をふたたびわがものにしようと、もがいていた。もちろん当時のフランスにとって、ライン占領地域の併合は、政党・政派の別なく、戦略上、また政治・経済上の理由から、いわば既定の方針とみなされていた。一月三十一日の国民議会では、ダントンも、ベルギーの併合に賛成し、共和国が「自然の指示する」国境まで領土を拡げることがを要求している。カルノーも、二週間後、ライン地方にたいするドイツ帝国の歴史的占有権の主張は掠奪にもとづくものであり、フランスへの帰属を求めるライン地方の住民の自由な選択こそ自然法にかなつた正当なものである、と主張した。

しかし、△戦争の党▽としてのジロンドの対外政策が△解放戦争の宣伝▽から△侵略戦争▽に移行することは、避けられぬところであつた。領土の拡大は、大ブルジョワジーの利害に直接結びつく。ジロンド派が経済危機の解決策を被征服国の搾取に期待したのも、フランスの大ブルジョワジーの利害にてらしてみれば、当然のことであつたらう。

ドイツにおける民主主義のうしろだてを「解放軍」Vとしての占領軍に見いだしていたマインツのジャコバン派は、マインツ革命をとおしてドイツの近代化の突破口を切り開こうとしたその道すじにおいて、まさに現実政治の論理から、本来の意図に反してではあれ、フランス革命のなかの好戦派の政策に結びつくことにならざるをえなかったのである。そして、このことが、もともと脆弱だった革命の大衆的基盤をかためていくうえで、きわめて重大な障害となつたことは否めない。フランス自体においては、革命の峻厳な論理からやがて恐怖政治へとつきすすんでいくジャコバン独裁への指向は、現実との妥協をしらぬ非戦の思想の徹底と表裏一体をなすものであった。

コスモポリタニズムがブルジョワ・ナショナリズムのたんなる裏がえしにすぎない、というそれ自体正当な現代的観点から、プロレタリア・インタナショナルイズムとブルジョワ・コスモポリタニズムとをただ機械的に切り離してしまふのではなく、まさにプロレタリア・インタナショナルイズムの源泉のひとつとしての、近代市民社会形成期における啓蒙主義的コスモポリタニズムがはらんでいた問題性を、フランス革命期のマインツでのジャコバン派の活動を追究していく作業のなかから、多少とも明らかにしていくためには、やはり、フランス革命とドイツ民主主義がそれぞれにかかえていた歴史的、社会的特殊性をそれぞれの側から関係づけて、把握しなおす必要があると思われる。

*

マインツ市議会とライン地方ドイツ国民議会のための選挙は、数回延期されたのち、一七九三年二月末におこなわれた。この選挙をまえに、臨時行政部は、前年十二月十五日のパリ国民議会の法令にもとづいて、同業者組合と教会

にたいし、すべての特権を放棄して、自由と平等の原則に従うように要求した。しかし、この命令はほとんど実行されなかった。もともと商人や同業者組合の親方たちがフランスへの合併に反対したのは、主として経済上の理由からであった。かれらの商売は、長いあいだ選挙侯の宮廷生活にふかく依存していたし、貴族の逃亡によってかれらは、いわばその顧客の大半を失ってしまったのである。それにフランスへの合併は、これまでかれらが維持してきたライン右岸の諸地域との取引関係にひびくかもしれぬ、という不安もあった。かれらは、一時的にマインツを離れなければならぬことになっても、その損害はかならず取りかえせる、と計算した。

農民や都市下層民も動揺していた。ジャコバン・クラブのメンバーの献身的な努力にもかかわらず、選挙のための住民大会にはごく少数のものしか集まらなかった。参加したのも大部分はおよび腰だった。大衆は、フランス軍の公約が実行されないことにすっかり失望していたし、プロイセン軍が近くまで迫ってきていることに恐怖をいだいていたのである。選挙に参加すれば、あとで利敵行為の責任を問われることになる、という噂がひろまっていた。結局、選挙はきわめて低調で、マインツとその周辺部において、一万人以上の有権者のうち投票総数は三七五にとどまった。

まったく無惨な選挙結果ではあったが、ともかくこの選挙をへて、三月十七日には、 \wedge ライン左岸自由ドイツ国民議会 ∇ が召集された。これは、実質はともかく、すくなくとも形式上はドイツにおける最初の近代的な議会である。ライン左岸地域の全市町村の約六分の一が代議員を送ってきた。ホーフマンが議長に、フォルスターが副議長に選ばれた。マインツのジャコバン派は、正式にかれらのクラブを解散した。国民議会は、ランダウからビンゲンにいたるフランス軍占領地域全域におよぶ「自由・独立・不可分の国家」の創設を宣言し、ドイツ皇帝および帝国とのいっさ

い、の関係を絶つて、ドイツの歴史にはじめて主権在民の基礎のうえに共和制をしくことを布告した。フォルスターは、三月二十一日の演説で、国民議会は「自由なドイツ人民を代表し」、「いままで限りなくやしめられ、さげすまれてきた人民各層の名において行動する」と宣言した。

「高邁なフランスの人民は、みずから武器をとって起ちあがり、久しく抑圧されていた諸国民を圧制のくびきから解きはなつた。……この自由の戦士たちは、他国の人びとの幸せを願ひ、そのために生命さえ犠牲にして惜しまない。ドイツ人民の信頼はかれらのものである。……われわれを解放し、われわれを守ってくれるこれらフランスの戦士たちを国外に去らせてはならない。組みあわせた腕を二度とほどかないように、かたく結びあおう。自由ドイツの人民と自由フランスの人民は、こんごひとつの人民を形成し、もはやなんびとによつても分かたれることはない。」

このフォルスターの演説からもうかがわれるように、新しい共和国をフランスの同盟国として独立させるべきか、それともフランスへの編入を指向すべきか、という問題をめぐる討議は、最終的に合併論に落ちついた。フォルスターは、『新マインツ新聞 人民の友』三月二十二日号のなかで、かれの合併論の根拠をさらに詳しく次のように述べている。

「われわれの共和国は、たんにひとつの自由国家を主張するだけでは、とうてい国家として自らを存続させることができない。われわれは、あまりにも弱体である。ドイツの諸侯は、われわれを認めようとはせず、人民主権・自由・平等の原則をつらぬこうとする小国を絶対に放置しておかないだろう。かれらは、支配者として、あくまでも人民に命令する立場を捨てようとしなない。生れながらにしてその特権がある、とかかれらは思いこんでいるのである。われわれには、このような環境のなかで、フランスとのたんなる同盟によるだけでは、わが国の安全に必要な支援が十

分えられるとは、とうてい期待できない。同盟を結ぶということには、たしかにわれわれにとって有利な点もある。しかし、われわれがフランスから受ける援助を、われわれは何によって支払うことができるのか。われわれにたいして、フランスは、旧支配者である王侯や貴族や僧院の財産を戦費の代償に要求してくるだろう。このように考えてくれば、われわれとしては、わが国がフランス大共和国の一部となり、われわれがフランス国民としての権利と義務を共有することができるよう、働きかける以外に道はない。——なお、フランスへの統合がわれわれに必要なのは、たんにわが国の安全のためだけではない。大国への合体の結果として、さまざまな利益がマインツにもたらされるのは、目に見えている。ラインの交易は栄え、わがマインツには、フランスからもドイツからも大勢の商人たちが集まってくることになるだろう。」

△ライン左岸自由ドイツ国民議会▽は、ただちにマインツ共和国のフランスへの合併を決議し、この決議にもとづく申請をおこなうために、フォルスターをフランスへ派遣することにした。数日後、フォルスターは他の二人の代表とともにパリに向けて出発し、三月三十日には、パリの国民議会に申請書を提出した。

フォルスターたちは、しかし、二度とマインツに戻ることができなかった。その間に、プロイセンの軍隊がマインツ市を完全に包囲してしまったからである。フランス軍は市の要塞にたてもって抗戦した。アンドレアス・ホーフマンは、四か月間にわたる包囲のあいだ、マインツ共和国政府の責任者として市の防衛を指導した。一七九三年七月二十三日、フランス軍はプロイセン軍に要塞を明け渡した。フランスへの亡命に失敗したジャコバン派の何人かは捕えられ、数か月間にわたってドイツ各地の監獄に拘禁された。選挙侯の政府はマインツに戻り、△ライン左岸自由ドイツ国民議会▽の名で出された布告をすべて破棄した。

フォルスターは、パリでの苦しい亡命生活のなかで翌一七九四年一月十二日、三九才で病死した。枕もとにはインドの地図がひろげられていた、という。おそらくは旅行への夢想が病床のかれにとって唯一のなぐさめであったのだろう。ジロンドの没落とともに始まったロベスピエールのもとでの恐怖政治の経験によって、かれの気もちがいかに索漠としたものになっていたか。代表のひとりとしてマインツからかれに同行してきたアダム・ルックスも、シャルロット・コルデの処刑のすぐあとで、みずから断頭台にのぼって死んでいった。パリにおけるフォルスターのきわめて屈折した思想の動きを、全体的な連関のなかで追究することは、しかし、今回の研究ノートの主題ではなく、改めて別の機会にゆずらなければならない。